

司式:大谷 昌恵  
奏楽:中井喜久子

前奏:「目覚めよ、と我らと呼ぶ声」(J.S. バッハ)

招詞:わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある。(詩 124.8)

讃美歌:57「ガリラヤの風かおる丘で」

交読詩編 130 篇

- 01 【都に上る歌。】深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。
- 02 主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。
- 03 主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら/主よ、誰が耐ええましょう。
- 04 しかし、赦しはあなたのもとにあり/人はあなたを畏れ敬うのです。
- 05 わたしは主に望みを置き/わたしの魂は望みを置き/御言葉を待ち望みます。
- 06 わたしの魂は主を待ち望みます/見張りが朝を待つにもまして/見張りが朝を待つにもまして。
- 07 イスラエルよ、主を待ち望め。慈しみは主のもとに/豊かな贖いも主のもとに。
- 08 主は、イスラエルを/すべての罪から贖ってください。

朗読聖書 創世記 35. 1-22

#### ◆再びベテルへ

- 01 神はヤコブに言われた。「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてその地に、あなたが兄エサウを避けて逃げて行ったとき、あなたに現れた神のための祭壇を造りなさい。」
- 02 ヤコブは、家族の者や一緒にいるすべての人々に言った。「お前たちが身に着けている外国の神々を取り去り、身を清めて衣服を着替えなさい。」
- 03 さあ、これからベテルに上ろう。わたしはその地に、苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る。」
- 04 人々は、持っていた外国のすべての神々と、着けていた耳飾りをヤコブに渡したので、ヤコブはそれらをシケムの近くにある榎の木の下に埋めた。
- 05 こうして一同は出発したが、神が周囲の町々を恐れさせたので、ヤコブの息子たちを追跡する者はなかった。
- 06 ヤコブはやがて、一族の者すべてと共に、カナン地方のルズ、すなわちベテルに着き、
- 07 そこに祭壇を築いて、その場所をエル・ベテルと名付けた。兄を避けて逃げて行ったとき、神がそこでヤコブに現れたからである。
- 08 リベカの乳母デボラが死に、ベテルの下手にある榎の木の下に葬られた。そこで、その名はアロン・バクト(嘆きの榎の木)と呼ばれるようになった。
- 09 ヤコブがパダン・アラムから帰って来たとき、神は再びヤコブに現れて彼を祝福された。
- 10 神は彼に言われた。「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名はもはやヤコブと呼ばれない。イスラエルがあなたの名となる。」神はこうして、彼をイスラエルと名付けられた。
- 11 神は、また彼に言われた。「わたしは全能の神である。産めよ、増えよ。あなたから/一つの国民、いや多くの国民の群れが起り/あなたの腰から王たちが出る。
- 12 わたしは、アブラハムとイサクに与えた土地を/あなたに与える。また、あなたに続く子孫にこの土地を与える。」
- 13 神はヤコブと語られた場所を離れて昇って行かれた。
- 14 ヤコブは、神が自分と語られた場所に記念碑を立てた。それは石の柱で、彼はその上にぶどう酒を注ぎかけ、また油を注いだ。
- 15 そしてヤコブは、神が自分と語られた場所をベテルと名付けた。

#### ◆ラケルの死

- 16 一同がベテルを出発し、エフラタまで行くにはまだかなりの道のりがあるときに、ラケルが産気づいたが、難産であった。
- 17 ラケルが産みの苦しみをしているとき、助産婦は彼女に、「心配ありません。今度も男の子ですよ」と言った。
- 18 ラケルが最後の息を引き取ろうとすると、その子をベン・オニ(わたしの苦しみの子)と名付けたが、父はこれをベニヤミン(幸いの子)と呼んだ。
- 19 ラケルは死んで、エフラタ、すなわち今日のベツレヘムへ向かう道の傍らに葬られた。
- 20 ヤコブは、彼女の葬られた所に記念碑を立てた。それは、ラケルの葬りの碑として今でも残っている。
- 21 イスラエルは更に旅を続け、ミグダル・エデルを過ぎた所に天幕を張った。
- 22 イスラエルがそこに滞在していたとき、ルベンは父の側女ビルハのところへ入って寝た。このことはイスラエルの耳にも入った。

#### 祈祷

聖なる主なる神さま。聖名を崇め、賛美致します。降誕前第5 主日の朝、あなたは、私たち夫々に新しい命を与えてくださいました。そして、全てを整え、私たちが御前に、礼拝を献げる民として、この礼拝堂に、あるいは、オンラインでの礼拝の場に集めてくださいました。ありがとうございます。あなたによって与えられたお恵みによって、兄弟姉妹の皆さまと共に集い、御前に賛美と祈りをお献げし、あなたからの御言葉によって励まされる時を与えられたことに重ねて感謝を致します。

11月に入っても小春日和の日が続いていましたが、この数日は寒さが一段と厳しくなってきました。この寒さによって体調を崩されている方もいらっしゃると思います。特に、お年を召した方、ご病気を抱えておられる方には、この寒さがこたえることと思います。どうぞそれらの方々の体調をあなたが顧み、速やかに体調が回復へと向かいますよう、癒しの御手を差し伸べてください。体調を整えることができないために、また、夫々のご事情によって、今日、礼拝に行きたくても来ることができない友がいることを覚えます。どうぞ、そのような方々の上にも、今日ここに居る私たちと同じ祝福とお恵みがありますようにお願い致します。

神さま、今日は謝恩日として礼拝をお献げしています。あなたによって与えられた生涯を伝道者として生きた人々の、そのお働きに感謝するとともに、引退後の生活があなたによって守られ、支えられますようにと願います。そのために、お献げするものが十分に用いられますように。また、毎日の歩みの上に、あなたからの豊かな祝福がありますようにと祈ります。

本日はまた、北支区の交換講壇として千代田教会から戒能信生先生をお迎えして御言葉の取次ぎをしていただきます。この日の為に備えをしてこられた戒能先生の上に、あなたが豊かに聖霊を注ぎ、先生が十分に大胆に御言葉を語ることができるようにお守りください。また、戒能先生を送り出してくださった千代田教会に感謝するとともに、今日、千代田教会で説教する佃雅之牧師と千代田教会の皆さんとがお献げする礼拝の上に豊かな祝福とお恵みがありますようにと祈ります。

この感謝と願いの祈り、私たちの主イエス・キリストの聖名を通して、御前にお献げを致します。アーメン。

讃美歌:543「キリストの前に」

## 説教 「ベニヤミン(わたしの幸いの子)」 戒能信生(千代田教会)

北地区の交換講壇で久しぶりにこの信濃町教会の講壇に立てることを大変嬉しく思っています。もう、私もずいぶん年齢を重ねて、健康面でも体力的にも限界を感じていますので、来年3月には現在仕えている千代田教会を退任するつもりです。ですから、こうして皆さんとお会いできるのも最後の機会になるかもしれません。私自身が、あの神学生の時代から、この教会、この信濃町教会で育てられてきたことを今改めて覚えて感謝を申し上げたいと思います。

さて、今日取り上げる聖書の箇所は、先ほど読んでいただいた創世記35章です。ここには族長ヤコブの晩年の姿が記されています。創世記にはアブラハム、イサク、ヤコブといった族長たちの伝承が、各部族に伝えられた父祖たちの伝承を撚り合わせて編集されています。特に創世記27章から始まる族長ヤコブについての伝承は、中でも最も詳しく、また複雑な構成を持っています。双子の兄エサウとの相続争いに始まり、父親のイサクと兄エサウを騙して長子の特権を奪い取ったヤコブは、それゆえに故郷を追われて遠くハランの地に逃げて行かなければなりません。その後ハランの地で叔父ラバンの下で日々労苦を重ねたヤコブは、20年後に家族を伴い、獲得した財産を携えて、再び故郷の地に帰って来ます。そして宿敵であった兄エサウと劇的な和解を果たし、ここに族長ヤコブの伝承は大団円を迎えたはずでありました。今日の個所の直前創世記33章には、そのエサウとの再会と和解の物語が美しく感動的に描かれています。

そして、族長ヤコブについてのドラマティックな物語は、この33章で終わり、少し間をおいて、今度は37章からヤコブの息子ヨセフの物語が新しく始まります。このエサウとの和解の物語33章と、息子ヨセフの物語が新しく始まる37章以下のその間・狭間に、ヤコブについての雑多な伝承、前後の二つの大きな物語に回収できなかったその他の伝承が挟み込まれています。それが、このヤコブの晩年とその一族を描く34章、35章なのであります。すなわち、創世記はその後のヤコブについて、しかも年老いた晩年のヤコブとその一族についての断片的な伝承を34章と35章に付け加えているのです。それは族長ヤコブとその一族のスキヤンダル・醜聞であり、晩年のヤコブの無力を伝える不思議な伝承群と言えます。

まず、今日の箇所の直前34章に伝えられているシケムでの出来事について簡略にみておきましょう。ヤコブとレアとの間に生まれた一人娘のディナがシケムの原住民の若者に見初められてレイプされてしまいます。しかしその青年はレアを愛して一族と共にヤコブに正式に結婚を申し込みます。ディナの兄たちヤコブの息子たちは激しく憤りますが、結果としてシケムの一族が割礼を受けることを条件に結婚を承諾します。

この伝承の背景には、異なった部族に属する遊牧民の娘と農耕民の息子の結婚という難問がありました。しかし、二つの部族の承認の下に若い2人が正式に結婚するという形で一族のスキヤンダルがようやく修復されると思われた矢先のことであります。

シケムの一族がまだ割礼の傷に苦しんでいる間に、ヤコブの息子たちがシケムとその一族を襲撃して皆殺しにしてしまうのです。騙し討ちにしてしまったのです。これを知ったヤコブは34:30で次のように嘆きます。「困ったことをしてくれたものだ。わたしはこの土地に住むカナン人やペリジびとの憎まれ者になり、のけ者になってしまった。こちらは少数なのだから、彼らが集まって攻撃してきたら、わたしも家族も滅ぼされてしまうではないか」。羊や山羊などの小家畜遊牧民で

あるヤコブの一族は、自分の土地を持たず農耕民であるカナンの先住民たちの了解のもとに遊牧生活を許されて生活をしていました。しかし、猛々しい息子たちと蛮行によって先住民との共存は今や不可能になってしまったのです。一族は、その地を急いで立ち退かなければならなくなってしまいました。ヤコブの嘆きは痛切であったはずですが。このヤコブの嘆きに対して息子たちは34章の最後に、「わたしたちの妹が娼婦のように扱われてもかまわないのですが。」と言い返しています。

族長ヤコブは、今年年老い、若い息子たちを制御できないでいる姿が端無くもそこに露呈しています。あの希望と勇氣に満ちたヤコブにして、その年老いた晩年には息子たちから自らの無力を突き付けられなければならなかったのです。このような経緯を経て、ヤコブは一族の者たちに「もう一度ベテルに立ち返ろう」と呼びかけます。35:2から、「ヤコブは、家族の者と一緒にいるすべての人々に言った。『お前たちが身に着けている外国の神々を取り去り、身を清めて衣服を着替へなさい。さあ、これからベテルに上ろう。わたしはその地に、苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る』」。ベテルは若き日のヤコブが自らの犯した非行のゆえに故郷を追われた逃亡の旅の途中、神と出会った場所でありました。あの「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守る。私は決して見捨てない」(28:15)と、神が約束を与えたのが、まさにこのベテルでありました。ヤコブはシケムでの一族のスキヤンダルと非行の後、もう一度自分の信仰の原点であるベテルに家族と共に立ち帰ろうとするのです。旧約聖書学者フォン・ラートは、これをいわば「巡礼の始まり」と想定しています。聖地に立ち返り、神の祝福約束をもう一度確認する旅として、その後、聖地への巡礼はイスラエルで制度化されて行ったとされます。

そのベテルでのことです。35:8以下、一族の祖母、一族のおばさんともいえる乳母デボラが死にます。デボラはヤコブの母リベカの乳母とされていますからかなりの高齢であったはずですが。シケムの先住民の追撃を逃れての激しい旅路に、年老いたデボラは耐えられなかったのでしょうか。8節、「リベカの乳母デボラが死に、ベテルの下手にある榎の木の下に葬られた。そこで、その名はアロン・バクト(嘆きの榎の木)と呼ばれるようになった。」、お気に入りの地名の由来の伝承『地名譚』としてそこに記されています。続く9節以下には、嘆きの中にあるヤコブに神が現れて次のように祝福します。10節「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名はもはやヤコブと呼ばれない。イスラエルがあなたの名となる。」そして改めてヤコブとその一族を祝福するのです。11節「わたしは全能の神である。産めよ、増えよ。あなたから/一つの国民、いや多くの国民の群れが起こり/あなたの腰から王たちが出る。」そして「ヤコブは、神が自分と語られたその場所に石の記念碑を立て、油を注いでベテルと名付けた(14節)として、もう一つのベテル伝承として位置づけられています。

しかし、さらに悲劇は続きます。ベテルを出発した直後のことであります。16節以下、ヤコブの最愛の妻ラケルが難産のために亡くなります。その悲劇は次のように記されています。16節から、

16 一同がベテルを出発し、エフラタまで行くにはまだかなりの道のりがあるときに、ラケルが産気づいたが、難産であった。

17 ラケルが産みの苦しみをしているとき、助産婦は彼女に、「心配ありません。今度も男の子ですよ」と言った。

18 ラケルが最後の息を引き取ろうとするとき、その子をベン・オニ(わたしの苦しみの子)と名付けたが、父はこれをベニヤミン(幸いの子)と呼んだ。

19 ラケルは死んで、エフラタ、すなわち今日のベツレヘムへ向かう道の傍らに葬られた。

20 ヤコブは、彼女の葬られた所に記念碑を立てた。それは、ラケルの葬りの碑として今でも残っている。

こう記されています。すなわち創世記 35 章には、族長ヤコブとその一族の悲劇と不幸が織り重ねられるようにして記録されているのです。さらに、今日の個所の最後 22 節にはこう記されています。

22 イスラエルがそこに滞在していたとき、ルベンは父の側女ビルハのところへ入って寝た。このことはイスラエルの耳にも入った。

ルベンはヤコブの長男です。その息子がヤコブの側女と寝たという事実がヤコブの耳に入ったと言うのです。ヤコブの面目は失墜します。族長としての彼の権威は、もはや地に落ちたと言わなければなりません。創世記は、このようにヤコブの晩年の悲劇とスキャンダルを、これでもかと言わんばかりにこの場所に書き込んでいるのです。

通常、ヤコブの生涯と言えば、兄エサウとの相続争いや、叔父ルベンの下での奴隷奉公などのエピソード思い起こします。あるいはベテルの石を枕に寝た夢の中での神との出会い、また、エサウとの再会、感動的な再会と和解の物語を思い起こす人も多いでしょう。しかし、この創世記 34 章、35 章には、ヤコブとその一族とのスキャンダルと不幸が、悲劇が繰り返して報告されているのです。しかも、そのような事態に対して、族長ヤコブはほとんど無力です。一族のリーダーとしての指導力をもはや失っているようにすら見えます。その意味でこのエピソード群は晩年のヤコブの非力と、若く盛んなその息子たちを、もはや統率できない族長の無能ぶりを、一族の不幸と重ねて記録していることとなります。

しかし考えてみると、この晩年のヤコブの姿を私たち自身の現実と重ね合わせて読み取ることができるのではないのでしょうか。私自身、この私自身、年齢を重ねて、いわば人生の秋を迎えています。若い時には何不自由な健康に様々な問題が生じ、体力の減退を感じることも少なくありません。また、目も耳も歯も衰えて、定期的に病院に通うようにもなりました。それだけではありません。息子や娘たちは皆どう親の手を離れ、夫々が抱える問題に対して私は全く無力です。それは謂わば、当然のことではあるのですが、なんともやりきれない思いをすることもしばしばです。そして改めて、この創世記 34 章、35 章に書き込まれたヤコブの晩年の姿を自分自身の現実と重ね合わせて読まざるを得ないのです。年老いたヤコブが、相次ぐ不幸と自らの無力さの中で為したこと、やったことを改めて注目してみましょう。

息子たちの蛮行と自らの無力さを痛感させられる中で、彼はもう一度、もう一度ベテルに立ち帰ろうと一族の者たちに呼びかけます。自分の信仰の原点に家族と共に再び立ち帰ろうとするのです。それが族長ヤコブのした第一のことでありました。神がそのヤコブを祝福し、『イスラエル』という新しい名前を与えたと聖書は示します。しかし、悲劇は終わりません。なお、一族の不幸が続くのです。乳母デボラが死に、最愛の妻ラケルが難産の果てに最後の子供を出産して死なねばなりませんでした。その死の床で彼女は生まれた「その子をベン・オニ(わたしの苦しみの子)と名付け」ます。それは母ラケルの最後の悲痛な叫びでありました。生まれたばかりの赤ん坊を残して、母である自分が死ななければならぬのです。ラケルの悲しみと嘆きは、この「ベン・オニ(わたしの苦しみの子)」という名前に言い尽くされています。しかし、ヤコブはラケルが死んだ直後、その悲しみの子を抱き上げて静か

に「ベニヤミン(わたしの幸いの子)」と名付け直すのです。不幸を幸いと言い換えていくのです。それが相次ぐ不幸の中でヤコブがした第二のことであります。

ヤコブは今や歳を取り無力です。長男ルベンの非行が追い討ちをかけます。しかし、その中で、いわば立ち場なし、父親として、族長としての権威が失墜している現実の中で、生まれてきた子を「苦しみの子」ではなく、「不幸の子」ではなく、『ベニヤミン(わたしの幸いの子)』とを言い換えていくのです。そこに創世記が描く晩年のヤコブの姿があると言えます。ここに族長ヤコブ、すなわち『イスラエル』の年老いた信仰の姿があると言わなければなりません。

今年年老いた私たちも、自らの非力を嘆いてばかりいてはならないでしょう。様々な不幸や不条理の現実の中で、もう一度家族と共に、夫々の信仰の原点に立ち帰り、そして「苦しみの子」を、「不幸の子」を、『ベニヤミン(わたしの幸いの子)』と静かに言い直して行く、言い換えていく姿勢が求められているのではないのでしょうか。それが創世記に伝えられている晩年のヤコブの伝承が私たちに語りかけているメッセージ・指針であると言えます。

私たちが今いる世界は混乱と混迷に満ちています。ウクライナ戦争の帰趨はどうなるのか誰にも見通せません。ガザの惨状は言うまでもありません。このような世界の混乱のために人類が編み出した国際連合という装置も、今やほとんど無力です。そして、本国第一主義やポピュリズムの風潮が世界を覆っています。このような世界の現実の中で、非力な私たちにできることは、ヤコブに即して言えば、夫々の信仰の原点に立ち帰ること、そして「悲しみの子」を「わたしの最愛の子・ベニヤミン」と静かに言い直して行くことだと創世記が語りかけているのです。

今日から始まるこの週も、夫々が生かされている場所で、この御言葉に押し出されるようにして共に歩いていきましょう。主イエス・キリストと共に居てください。祈りましょう。

主なる御神よ。この惨憺たる世界の中で、私たち一人ひとりをキリスト者として、福音を証する者として生かしてください。夫々がうずくまっている場所から立ち上がり、イエス・キリストの聖名を証するために、新しく歩ませてください。夫々の信仰の原点に立ち戻り、苦しみの子、悲しみの子を、「わたしの最愛の子・ベニヤミン」と、静かに言い換えていく姿勢を私たちに備えてください。

今、困難の中にある、様々な困難の中にある日本の教会を、あなたが励ましてください。今、病床にある友のこと、困難を抱える友のことを覚え。あなたは共に居てください。御手を伸ばして慰め、顧みてください。

この願いを、主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 469「善き力にわれかこまれ」

献金・感謝(勝倉達)・主の祈り(讃美歌 21 93-9A)

主なる御神、秋が次第に深まり冬の気配を感じる 11 月第 4 主日の朝に、あなたの計り知れない大きな御憐れみと御慈しみによって、私どもを御堂に集め、また夫々の所にあつて、ライブ配信によって共に礼拝を献げる恵みと喜びとを与えてくださることを心より感謝致します。そして、今、私ども、北地区の交換講壇により戒能先生をお迎えして、先生のお取引により御言葉を心深く聞くことができ感謝致します。ヤコブが苦難の時ヤコブに応え、旅の間ヤコブと共にいてくださった神に感謝しつつ、ラケルによ

る 12 番目の子にベニヤミン(幸いな子)と名付けたことを通して終生信仰の途上にあり続ける人として生涯を歩んだヤコブの折り重なる事績を通して、戒能先生のお取次ぎにより、ヤコブの信仰の道を教えられましたことを心より感謝致します。そして、今、私ども、再び、この世へと遣わされようとしております。どうか私どもが、夫々、遣わされる馳場々々において、あなたに遣わされた者に相応しく歩み行き、少しでもあなたの宣教の御業に与ることができる力をお与えくださいますように切に願ひ上げます。

この礼拝に集うべくして集い得ない教会の肢々の上に、あなたが豊かに臨んでくださいますように切に願ひ上げます。

私どもは日々暮らし行く糧をあなたから豊に賜っております。今、その内から献身と感謝のしるしとして御前を献げたしました物を、どうか清めて御用のためにお用いくださいますように、切に願ひ上げます。

再び一巡りの日々へと歩み出そうとしている今、主の教えられた主の祈りを共に祈り献げて、その歩み出しとしてくださいますように。…「主の祈り」 アーメン。

派遣：讚美歌 92「主よ、わたしたちの主よ」

祝福：見よ。わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守る。わたしは決して見捨てない。主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなた方一同と共にあるように。アーメン。

報告：(1)会員消息、10/31 關 京子さん、11/23 岩藤潔さんご逝去。(2)クリスマス特別献金案内。(3)相互牧会案内。(4)次週窓拭き案内。(5)合同例会案内

後奏：「トッカータ ト短調」(J. パッヘルベル)